

スピーキング能力の育成を目指す授業

Teaching Conversation Skills in Class

小 室 俊 明

Toshiaki Komuro

0. 序論

英語教育の歴史は長いが、科学的で効果的な英語教育方法はまだ確立していないと言ってよいだろう。そのため英語教育の担当教員はそれまで自分の受けてきた英語教育や、英語教育学の研究者の発表した研究成果などの様々な情報を参考にしながらそれぞれのやり方で試行錯誤しているのが現状である。それでは英語教育学の研究者自体はどのような授業を行っているのだろうか。前述したように科学的で効果的な英語教育方法がまだ確立していない以上英語教育専攻の教員であっても広い意味では同じような試行錯誤をしていると言えるだろう。ただし集まってくる英語教育関連の情報量は当然ながら他の分野専攻の教員より多くなるので、その分だけ授業を行うときに考えることが多くなることになる。

本論は通常の学術論文とは少し観点を变えて、そうした英語教育学の研究者の一人として、どのような考えをもとに、どのような授業を行っているかを論じるものである。そのために本務校で行っている、初級の学生対象にスピーキング能力の育成を目指す授業（科目名：スピーキング・アクティビティ）を中心に組み立てやノウハウを論じるが、これは単なる一時間の教案や1年の授業の実践報告を意図したものではなく、もう一步踏み込んでその背景や注意点あるいは、どのように発展させられるかなどを総合的に論じたものである。その際はなるべく机上の空論にならないように今までの授業で実際にあった具体的な事例を多く含めておいた。

本論を書いたのには3つの理由がある。第一には自分の授業を客観的に見つめ直して点検したいということ、第二にはスピーキングの授業をどのように行ったらよいか模索している教員にいくつかの視点を提供すること、そして第三には広く建設的な批判をしてもらうためである。最後の点について少し補足すると、本論で私が「Aということを達成するためにXというアクティビティを行う」としたところで別の教員や研究者に「Aという目的のためならより効果的なYというアクティビティがある」ということを指摘してもらったり、「この授業の組み合わせとは順番（あるいは各アクティビティの配当時間）を変えたらより効果的であった」という報告をもらったり、また「この授業ではZという重要な観点が考慮されていない」というような様々な情報を提供してもらいたいということである。そうした情報が集まれば、それを参考にして授業を改善し、それをまた情報の提供者にフィードバックするといった循環が生じ、授業の質を高めて行くことができると思うからである。

1. スピーキング能力の育成の前提

スピーキング能力を論じるときにまず考えておきたいことは、この能力が大部分知識ではなく技能のレベルで習得されなくてはならないことである。（小室1997a, p.89参照）これをテニスに例えれば、頭でわかっていても実際にボールが飛んできたときに打ち返せなければだめだということである。日本の英語学習者はとも

するとこの面が不十分なレベルに止どまることが多いようであるから、この視点は重要であろう。テニスの比喻をもう少し続けると、それではテニスができるようになるためにはどのような準備が必要であろうか。避けては通れないのが基礎体力を付けることであろう。例えばテニスをしてすぐにへばらないように心肺機能を高めるためのジョギングをしたり、ラケットをコントロールできるだけの筋力を付けるためにバーベルを使ったり、素振りをするなどのトレーニングを行うことがあげられるだろう。スピーキング能力を考えると、こうした基礎体力にあたる部分のトレーニングが重要なのではないだろうか。後述するアクティビティの根幹にある発想はそういうものである。

ただしここで述べていることは、コミュニケーション型な教授法に反対する一部の教員がよく主張する「会話の基礎は文法であり、文法を学習していれば自然と話せるようになる」ということとは似て非なるものである。スピーキング能力の基礎体力の中にはたしかに文法に関するものも含まれてはいるが、旧来のドリルのようなものでは極めて限定的な効果しかない。少し乱暴な比喻で言えば「素振りさえしていればテニスは自然にうまくなる」という程度の正当性しかないだろう。(私見では英語教育の失敗は前者のような主張と、またその対局にあるような「英語でコミュニケーションをしてさえいれば文法の力も自然に身に付くので一切の意識的学習は必要ない」と言った極論にふりまわされたことが大きな一因であると思われる。)

それではどのようにすれば効果があがるのか。「バランスの取れた教授法」と言えば間違いはないのだろうが、その具体的な中身については残念ながら決定的な答えはまだない。私たちができる最善のことは、実際のコミュニケーションに必要な能力をもう少し新しい目で分析して、それを支える新しい下位能力の育成を視野に入れたアクティビティを地道に考えて実施し、ある程度の期間の後検証していくということである。

ある。その際には(理論がまだ未熟であるのだから)理論的に証明されていないものであっても経験から実証的に効果が上がりそうなものがあれば試す価値があると考えている。いずれ理論が成熟してくればそうしたものもどこかに組み入れられるようになるだろう。以下に述べる私なりの試みは「どのようにすれば効果があがるのか」ということに対する私なりの答えである。(ただし現在のところはまだその効果の実証的な検証を行うには至っていない)

2. スピーキング・アクティビティにおけるスピーキング能力育成のための4本柱+1

次にこの授業の中でスピーキング能力育成に効果があると思われる4本柱+1について説明したい。ここで言う4本柱とは

①Writing Weekly Diaries

②Listening and Guessing

③Vocabulary and Topical Knowledge Building : Reading Weekly Magazines

④Telling Opinions in English

のことを指し、+1とはShadowing and Voice Trainingのことを指す。

まずはそれぞれの柱がどういう背景から出てきたかということ、またそれぞれの柱についてどういう注意が必要であるかといった部分を先にまとめておいて、90分の授業でそれをどのように組み合わせるのかについては本論の最後にまとめたい。

2. 1 Writing Weekly Diaries

2. 1. 1 Weekly Diaryをアクティビティとして採用するようになった背景

まず最初に私がこのアクティビティを考えることになった発端から入りたい。(このことは当時の自分の未熟さを露呈することにもなりお恥かしいことではあるが私の言わんとすることを理解する手助けになると思われるので書くことにした。)

ある大学で英会話の授業を担当するようにな

ってしばらくして次の現象に気付くことになった。当時英会話の授業を担当していた大学ではその年度に初めて英会話の授業が開設されたこともあり、学生の動機付けが高く、学生はテキストをよく予習して授業にのぞんでいた。そのためアメリカのESL用の教科書の練習問題などは順調にこなしていた。英語による簡単な指示にもすぐ従ったので、ある意味ではかなり手応えを感じながら授業を進めていた。ところが夏休み明けに導入で“How did you spend your vacation?”と聞いたところ、ふだん流暢に練習問題の英語を発話していた学生がいずれも、顔をゆがめ「ウーアー」とやたらにうめきながらほとんど返事にならなかった。

このことにショックを受けてその原因を探っていると次の2つのことに思い至った。第一にはテキストの練習問題は予習をしておけば事前に発話をなけば暗記することができること。したがって授業中流暢に話していたのはその練習効果であり、普通の会話のように「その場で話すことを考えていく」ような状況には対処できないということになる。第二にはテキストに書いてあること（トピック）についてはある程度対応できても、自分の身の回りの具体的なことを英語で表現することがまったくできないということである。自分の趣味やクラブやアルバイト、あるいは家族の職業などの個人的なことにについて語る語彙や表現方法が著しく欠乏していた。これは当時の高校の英語の授業が教科書を読解したり、与えられた和文を英訳したり、文法の穴埋め問題だったり、いずれにしても自分から発信する部分がほとんどなかったからであると思われる。（したがってALTが年間授業を担当していてコミュニケーションな会話に接する機会が多いとか、オーラル・コミュニケーションの授業で自己表現活動が活発に行われるとかいったことでもあればこのような状況にはならないであろう）

しかし実際に英語で外国人とコミュニケーションを行う場合のことを考えると、個人の身の

回りのこと（個人が体験したこと、興味のあることなど）が話題の中核になってくるのはあきらかである。（仮にビジネスであったとしても、人間関係構築の上からも上記のような話題をまったく出さないのは不自然であることは洋の東西を問わないであろう）

それならばこの部分を強化することなしにスピーキング能力を身に付けることはありえないのではないだろうか。特に初級の学習者の場合には、語彙がわからないときにそれを乗り越えるstrategic competence（コミュニケーション方略）を持っていないことが多いので致命的であると言える。

そこでこうした個人に関する情報を授業で発信させるアクティビティを導入したのであるが、それはうまく機能しなかった。クラスサイズが30人程度のクラスでさえ興味の幅は広く、例えばある学生が夢中で純文学（あるいは競馬）の話をして、興味を持っていない学生が多ければ、白けてしまい本人も話す意欲を失ってしまうことになる。つまり仮に教員だけはsympathetic listenerになりうるとしても、個人のトピックに対する興味を30人で共有できないことがよく起こる。話している学生は（意欲さへ維持できれば）それでもメリットがあるだろうが、残りの学生にとってそれは無駄な時間になってしまう。こうした問題を部分的に解決する方法として考えられたのがWeekly Diaryである。

2. 1. 2 Weekly Diaryのメリット

上記で述べた問題は言い換えると、「学生に自分の身の回りのことを英語で話す習慣を付けさせたい」ということである。しかし前述したように授業でこれを行おうとするのは容易ではない。そこで発想の転換で、スピーキング能力を身に付けるのが目的ではあるが、取りあえず「学生に自分の身の回りのことを英語にする習慣を付けさせる」ことから始めてはどうかと思いついたのである。そのために毎週自分の身の

回りで起こったことを英語で書いてこさせる課題を与えてみた。そうしたところ以下に述べるような様々なメリットがあることがわかった。(diaryのやり方や指示については次のセクションを参照)

①その学生の能力に見合った英文の作成ができる

自分で書くことや書き方を選ぶわけだから、自分のcomfortableなレベルの語彙、文法を使用することができる。文作成能力が優れたものは複雑な文(1つの文)や文章(パラグラフやそれを組み合わせたもの)を、劣っているものは単純な文や文章を選択して自分を表現する。つまり文の構造も文章の構成も自分のペースで決めることができる。

②心理的な抵抗が少ないので安心して自己表現できる

自分を人前で表現することに慣れていない学生は発言をするのに激しい心理的抵抗を感じるところがある。うまく表現できないのではないかという恐怖感に加え、日本では大変peer pressure(他の学生の存在が与える心理的圧迫感)を強く感じる傾向があるので、なかなか自由に発言できない。(この「自分がどう思われるかを強く気にする」のはいじめを回避するためのサバイバル技術からきているのかもしれない)ところが日記は教員しか読まないものであるからpeer pressureはないし(したがって他の学生に知られてからかわれたり軽蔑されたりする危険はないし、少しプライベートなことについてだって書くことができる)、会話と違ってすべてのコントロールは書き手が握っているので不得意な構造や語彙を避けること(avoidance)も自在であるし、あるいは持ち時間があるので辞書などで調べることもできる。こういうマイペースぶりが許されるという安心感があるために、会話の折にはほとんど発言できないような学生であってもdiaryではかなりの自己表現を英語で行うことができる。

③文完成及び文点検などの文法力強化のトレーニングになる

会話ではお互いがわかっている事項はどんどん省略され、文もfull sentenceで言われることは少ない。(代わりにphraseなどが中心になる)それはコミュニケーションの原理からいって当然のことであるが、そうすると初級の学習者にとっては会話だけしてはなかなか文構造を使いこなせるようにならない。(コミュニケーション中心の授業で文法の力がなかなか身に付かないのはこのことが一因であると思われる)

diaryを書く場合は、(目に見える形で残るので)書き出した文は必ず最後まで完成させることが期待されるので途中で放り出すことができにくくなり、文を組み立てる力を付けるのには格好の練習になる。また言い放しで顧みる余裕のない会話と違って、自分が完成させた文を客観的に見ることができるために(夢中で話しているときなどに比べて)もう一度自分の作った表現を見直すことができることになる。これにより自らの英文を改善する機会が得られるし、英文の構造などが印象に残りやすい。また今述べたことはすべて文章のレベルでも当てはまる。文章全体の構成などについてもその組み立てが会話のときよりずっとよく意識できる。

もちろん書き言葉と話しことばはまったく同じではないので、そういう点でこのアクティビティについて疑問を持つ向きもあるだろうが、この場合ほとんどの学生は話すように書いているので、話し言葉の側からは問題は少ないと思われる。また書き言葉と話し言葉の微妙な違いは初級レベルにおいてはそれほど重要ではないと思われる。それよりも英語でコミュニケーションをしようとする態度の育成とその取っ掛かりを与えるメリットの方がはるかに大きいと思われる。

④英文の内容がよりコミュニケーション的なものになる

自分の書いたものに興味と反応を示す読者（ここでは著者を指す）に対して毎週のようにdiaryを書くために、これが手紙のような感じになり相手に何かを伝えようとする感覚が強くなる。そのために内容はかなりコミュニケーション的なものになる。授業ではなかなか本当にコミュニケーション的な側面が出ないものなのでこの面のメリットは大きいといえるだろう。

以上のメリットの他に次のような副次的なメリットがあることもわかった。

(1) 学生とのラポール（親密な絆）ができる

教員が自分の意見や興味のあることに共感を示したり、自分についての情報を教員と共有しているということから、一種のペン・フレンドに近い感覚が芽生えるために学生との関係がなごやかで親密なものになる。これは心理学でいうラポールであり、このために授業の雰囲気が以前と比べてなごやかになった。

(2) 担当学生の興味や考え方をより理解できるようになる

学生の興味や関心がdiaryを通してわかるために、話しをさせるトピックや説明をする際の例文を考えると、より学生が興味を覚えるものを選ぶことができた。

(3) 授業の状況を把握することができる

普段授業の内容に不満があったりしても、なかなかそれを直接教員に言うことはできないことが多い。しかしdiaryは少し間接的な感じがするの、ここには授業に対する様々な感想が書かれることが多いので、この情報を元に授業の進度や課題の与え方など様々な面で、てこ入れをすることができた。

(4) 学生に対する細かい対応ができる

diaryを通して学生の心理状態や悩みの一端がわかるので、それに応じた対応ができるよう

になった。例えば英語学習に自信がなく劣等感に悩んでいるような学生に対してはより励ますような言動を多くしたり、勉強法や参考書などについてアドバイスを与えることができるし、母親の病気で心配のあまり勉強が手につかない学生に対しては勉強のことはしばらく二の次にして暖かく接するとか、もちろん限界はあるが以前よりは細かい対応ができるようになった。

これ以外に個人的なメリットとしてdiaryを通じて学生から音楽や映画、本、イベント、料理のレシピなどについての様々な情報が得られるということがあった。その結果、自分一人では知ることのなかったおもしろいものに接する機会を得ることができたし、その感動を話すことによってさらに学生とのラポールを深めることもできた。（その話は英語ですることも多かったのでよいトピックの泉にもなった）

2. 1. 3 Weekly Diaryについての指示の仕方と注意すべき点

次にこの課題をどのように学生に指示し、こちらでどのように処理しているかについて説明したい。

①学生にはまず年度の初めに、上で述べた1. 「スピーキング能力の育成の前提」や2. 1. 1 「Weekly Diaryを課題として採用するようになった背景」などについての簡略な説明を行い、この課題の重要性を説明する。

②量は次の授業まで（通常は毎週）、1行おきでノート1ページ（サイズはB5）分。

*実際に学生が書いたものが少なすぎる場合は “It’s too short, make it longer please!” など書いて注意を促した。（左右のマージンがやたら広いもの、字の大きさがあまりにも大きいものなども同様に改善を勧告する）

次の授業までということだから、教員の都合で休講になったり、祭日や行事のために授業のない場合は1ページのままで増えない）

③内容については次の3つのもののいずれかを

選ぶように指示する。

- (1) 自分の身の回りで起こったこと及びそれについて感じたこと
- (2) その週に起こった出来事(事件, イベントなど自分とは直接関係がなくても関心のあるもの)に対する意見・感想
- (3) 上記2つのもので書きたいものがない場合, その週に考えたこと(eg. 卒業後の進路について, 喫煙問題について, 文化祭について etc.)。

*注意すべき点として, 自分が直接体験したことでない場合に, 事実の描写を詳しく書いてあるだけのものは好ましくないことを説明しておくことがある。例えば映画や本の詳しいあらすじ, 野球, サッカーなどの試合経過, 事件など(米大統領の来日スケジュール, 競馬の全レースの結果というのもあった)について詳しく書いてページを埋めて感想はほんの付け足し(あるいはない)ような場合がそれにあたる。これでは自分の身の回りのことや意見を英語にしたことにならないし, 英字新聞などの丸写しでお茶を濁すことができしてしまう。同じようにふさわしくないものには好きな詩や歌詞を長々と書いてページを埋めるものがある。(逆に感想が中心でそれを書くためにさわりを引用するのはさしつかえない。バランスの問題である。)

- ④年度の初めに行う説明でWeekly Diaryが提出されなかった場合のルールについて次の決まりをよく学生に認識させる。

- (1) diaryは提出されたか, されていないかで判断するので欠席, 書いたが忘れた, 書いていない, などで区別しない。すべて同一に扱う。
- (2) 提出されなかった週の分のdiaryは通常1ページのところを1ページ増やして2ページ分書いて後日必ず提出する。(ということはその次の週に提出する場合は, 新し

い週の分と合わせて3ページ分提出することになる。また2週分たまったときは $2 \times 2 + 1 = 5$ つまり5ページ分と提出ということになる)どんなにたまっても年度中に追いつくことを義務付けた。これはサボるとかえって大変だから毎週がんばろうという気にさせるためと, 逆に欠席した学生に対しいくらか努力をすることで挽回する道筋を示すためである。(例年何人かの学生は10ページ以上ためてから必死に書いて追いついていた)

*提出されたか, されていないかで判断するのだから, 本人がいなくてもdiaryがあれば提出されたと考える。(もちろん本人は当日欠席扱いにはなるが上記diary (2) のペナルティ分は上乘せを免除されることになる。例えば親族の結婚式などで事前に欠席するのがわかっているような場合にクラスメートに託して提出してもよいこととした)

- ⑤提出するdiaryは必ずノート形式のものを使用するよう指示する。

diaryを何週か続けると, 前と同じまちがいを繰り返しそうになったり, 同じ表現を再度利用したくなったり(調べたものは忘れてしまうことが多いので)など前に書いたところを参考にするとよいことがある。また内容面でも前に同じ話をしたかどうか, どこまで詳しく書いたかなどを確認したくなることがある。ところが指示しない場合レポート用紙に書く学生が多く, これは返却後すぐに捨てたりなくしたりしてしまっていてきちんとまとめていることは大変まれである。これではもったいないので必ずノートに書いてくるように指示している。その結果教員の側にもメリットがいくつかあることがわかった。

- (1) 学生が前の週以前に書いてあったことを前提に話を進めるときがあるが, 教員の側でそれを忘れている場合にページをめくって思い出すことができる。(自分が以前に

書いたことを覚えてくれていると学生が感じることはラポールを強める)

- (2) 提出しているか、挽回の分が済んでいるかなどの状況が一目でチェックできる。diaryの提出が遅滞している学生がよく後何枚で挽回できるかを聞きに来ることがあるがそのときにノートがあればそれをもとに簡単に割り出すことができる。また教員の側にも記録に付け忘れている可能性がないとは言えない。そのときに「出した、出さない」の不毛な水かけ論にならないためにもすぐ確認できるノート形式が有効である。

- ⑥diaryには表紙に必ず、科目名、氏名、学生番号、グループ番号（授業の組み立てのセクションに後述）をはっきり見えるように書くこと、また各ページには必ず日付（例：5/10～5/17分）、氏名、学生番号、グループ番号を記入することを指示する。

これは短時間でまちがいをなく誰のものか、いつのものかを確認して記録を付けやすくするための指示である。（グループ番号の目的については後述）

2. 1. 4 Weekly Diaryのチェックの仕方

提出されたdiaryについては原則として、その日の授業後に返却することにした。それは書いたことに対する反応を少しでも早くしたかったからである。提出2, 3日前に起こった出来事についてこちらに伝えようとして興奮して書いたことに対する返事が、早くて1週間後（行事や祭日などで授業がなくなれば何週間も後になる）では学生の伝えたいという気持ちに水を差すような気がするからである。（スピーディに返却されるからこそ緊急の悩みについての助言を求めるdiaryなどがあると考えている）

そのためには短時間でできて最大限の効果をあげることを目指した方法を考えた。

- ①文法やロジックの誤りについてはすべての誤りを訂正したのでは膨大な時間がかかり、な

おかつその効果は疑問である（Hatori et al 1990, Kanatani et al 1993 参照）ので全面的な添削は行わない。文法の訂正などは以下の場合のみに行うこととした。（それについては学生によく説明しておく必要がある）

- それが理解の妨げになると感じられた場合（つまり言おうとしている意味がわからなくなってしまうような誤り）
- 学生の習熟段階から考えてその誤りがありにも初歩的であり、かつ繰り返されるような場合

- ②添削に代わるものとして内容に対してできるだけ反応するようにした。

そもそもこのdiaryはコミュニケーション的な性質を持つものと設定したのであるから、こちらの書く短いコメントも内容中心にした。時間の制限があるので特段のコメントや返事が要求されるもの以外は最小限の長さのコメントを効果のありそうな場所に素早く書くようにした。例えば「試合に勝った」とある行の横に“Congratulations!”とか「せっかくの料理が焦げてしまった」とある行の横に“oh, no! Too bad.”などのように書く。他にも“Cheer up!”, “Good luck!”, “Take good care!”, “Better luck next time!”, “I agree.”, “Sounds great!”, “I don’ t believe this.”, “You must be kidding!”, “Take it easy.”などのような表現を多く用いている。（これらはなるべく末尾に単調に置くのではなく、diary中のコメントの元になることが書いてあったところの近くに置くとよい）

重要と思われる問題や質問に対しては要領よくまとめた英文で返事を書く。（短くできないようなとき、あるいはその日あまり書く時間がとれないようなときには“I’ d like to talk with you about this problem, so please come to me after class.”とか“there just isn’ t enough space here to discuss such a serious problem. If you want my personal opinion, come to me in person.”のように書

いて休み時間にフォローした。

またどうしてもこちらでコメントすることが見当たらない場合はスタンプを押すだけで済ませることもある(コメントを書いたものもスタンプは押した)。このスタンプはインク内臓のタイプ(シャチハタ式)のもので、可愛い顔とHave a nice day! やThank you! などのメッセージの組み合わせだった2色のもの何種類かを使用した。このスタンプは読んだことを示すマークなので学生はそれで色々なことを判断できるようになっている。例えばある学生はその日のdiary以外に数週間前の欠席分の挽回のdiaryを書いたが、教員がそれに気付いたか不安だったとする。その場合はスタンプが挽回のところにもあるかどうかを自分で確認することができる。ないときには訴え出て読んでもらうようにするなど自己管理の一端になる。このスタンプは教員の記録ミスに対する学生側の動かぬ証拠にもなる。(なおこのスタンプはわりと学生に人気があって、押されるのを楽しんでいたようだった)

注: このセクションではWeekly Diaryのスピーキング能力育成に関わるメリットを詳しく書いてきたが、その多くのメリットにも関わらずこれはスピーキング能力の一部をカバーするものに過ぎず、これだけでは話せるようにはならないことは自明の理であろう。

2. 2 Listening and Guessing

2. 2. 1 Listening and Guessingをアクティビティとして採用するようになった背景

リスニング能力はスピーキング能力とは別々の能力として扱われてきた。確かにリスニング能力の方はラジオや駅のアナウンスなどから必要な情報を聞きとるときなど、それだけで必要なときがあろう。しかしスピーキング能力を考えた場合には単独の即興スピーチ(のように一方的に話すもの)を対象とすることは通常ないのではないだろうか。スピーキング能力と言っても実は会話の中の話す部分のことを中心に考

えていると思われる。そうするとこれは相手の言ったことを理解しながらそれに合わせて話すことになり、リスニング能力とセットで考える必要がある。(小室1997a p.90参照) このアクティビティはそうした部分の補強を念頭に考えられたものである。

さて上で提起した問題をもう少し掘り下げて考えてみたい。簡単に言えばスピーキングとは「会話が進行中に相手が言ったことのエッセンスを理解して、すぐそれに応じて発話をする」というプロセスになるわけである。しかし初級の学習者の場合は相手の言ったことのエッセンスを理解するのは容易ではない。恐らく発音、語彙、文法など様々な面で確信を持って理解できないところが色々出てくるであろう。それでもコミュニケーションは進行中であるから時間的余裕はないし(どんどん先へ進む)、かと言ってそう簡単にそこで打ち切って逃げてしまうのも抵抗があるという場合は、(ひどく不安な気持ちながらも)わかっている情報-聞き取れたことプラス場の状況、相手の顔の表情、参考になる予備知識などを総動員して多分こういことを言っているのではないかと見当を付けて(これのことを本論ではguessingとしている)、それを元に次の発言を考えることになるだろう。そうであれば、この不安に耐えながらともかく最善のguessingをリアルタイムですするという訓練がスピーキングの能力開発には不可欠ではないだろうか。(しかし現状の多くの英語教育のカリキュラムの中にはこうした訓練が見当たらないことが多い。)

また初級者はこうしたguessingに集中力を持続させるのに不慣れなため、すぐ疲労してしまい注意力が散漫になりコミュニケーションしようという意欲をなくしてしまう傾向がある。それを回避するためにはguessingのスタミナを付ける必要がある。

そこでそのための基礎訓練として考えたのが、録音教材の会話やナレーションを聞かせて、その要点をメモさせる練習である。教材は学生の

レベルに合わせて、完全に理解するのは難しいがまったく理解できないわけでもないという物語のテープやCDを使用している。（人の声だけではなく効果音なども入っているものを選んでいく。）

2. 2. 2 Listening and Guessingの実施手順、指示の仕方とその注意点

上述した（わからないことが含まれている）テープやCDを毎回10～15分程度聞かせて、その要約を書かせている。要約は内容理解にポイントを置いて日本語で書かせてもよいし、早いスピードで英語でまとめる練習として英語で書かせるのもよい。ただし初級の学生にいきなり英語で要約を書かせようとするのは負担感が重く感じられるので、授業では最初はしばらく日本語でのみ要約を書かせ、慣れてきた頃を見計らって3回に1回程度を英語で要約させている。

時間の関係上、要約を書かせるときには一度だけしかテープ（CD）を聞かせないのが原則（後述するように要約を回収した後にも一度聞かせるので、一度だけでも計約20分かかってしまう）なのであるが、初級の学生相手なら少し短くして二度聞かせる手もある。（そうすればもう一度聞かせる分と合わせて3回分（7分×3）で計21分になる）

この10分程度というのはコミュニケーションに不慣れな学生にとって集中して聞いているにはかなり長い時間だと感じられるようである。そこで途中で集中力がとぎれてしまう学生もいる。しかし学生には途中で投げってしまうことについては厳しく注意している。「前半についてだけ書いて、後半について何も書いていないというのは怠慢以外の何物でもなく許されないことである。なぜならば後半にも人の名前など聞き取れる簡単な部分が必ずあるし、最悪でも効果音が聞こえるのだから何か書けるはずである」ということを繰り返し強調している。またそれが評価に反映されることも理解させる。そうすると安易に投げ出す学生は目に見えて減っ

ていく。

要約に向かい合う全体的な態度については、学生に「わからないところがあるのは当然だと思っている。だけどわからなかったところに囚われるのはやめてほしい。私はわからなかった部分には興味がない、大切なのは何がわかったかということである。英語を聞いてわかったこと、効果音、文脈のヒント、想像力などを総動員してとにかく最善の解釈を書いてほしい。」と指示している。（もちろん始める前にはそれが実際のコミュニケーションでいかに重要な能力の基礎訓練であるかは説明している）

学生が要約を書き終わって提出すると同時に事前に用意したスクリプトを配って、それを見ながらも一度同じところを聞くようにしている。これはわからないながらもまだ耳に英語の音が残っているうちに書かれた英文を見ることによって、頭の中に残っていた意味不明の音が意味のわかるものに置き換えられる効果を期待してのものである。（映画を見ているときに字幕の日本語がきっかけで初めに聞いたときにはよくわからなかった英語の音がワンテンポ遅れて、急にわかる英語になって理解できるときがある。それと類似した効果があるのではないかと思っている）いずれにせよ通常日本の学生は耳で聞き取る力よりも読み取る力の方が上であるから、書かれたスクリプトはずっと簡単に理解できるので見ながら聞けば、自分で自分の要約の誤りや不足部分に気付くことになる。（この自分で気付くということは学習にとって大切なことだと思われる）その後は必要に応じて教員がkey pointやkey wordについて英語で学生に質問したり、日本語で補足して大筋の理解を固める。

テープを聞かせる際には、前回のあらすじを簡単な英語で（教員が）聞かせて、ポイントを思い出させてから始めるようにしている。（ときにはとぼけてどこまで聞いたか忘れたふりをして、“Where were we? Please help me remember.”とか“What happened to Cat（主人公の名前）last week?”などと言って学

生にあらすじを言わせることもある。) 長い物語の場合は毎回聞いていくうちに話の展開や登場人物の設定や性格がかなりわかってくるので、要約しやすくなるようである。最初の頃はとんでもなくはずれた要約を書いていた学生でも年度の終りごろにはかなり核心をついた要約を書くようになる。またわからないことが混ざっている(全部はわからない)ことに対する精神的な免疫もだいぶ付くようである。

このアクティビティもスピーキング能力の基礎訓練として行っているわけだが、それ以外にも次のようなメリットがあるものと思われる。第一はリスニング能力自体が大幅に向上することである。例えば「前には字幕がないとわからなかったニュースや映画の英語が直接理解できた」のようなことが毎年複数の学生のdiaryに書かれている。(また直接言いに来る学生も必ず数人いる)つまり会話以外の局面での単独のリスニング能力も伸びるので、これは例えば海外でアナウンスなどを聞き取る力(これは初級の英語学習者には苦手なことの一つである)を付けることにつながる。この授業でも最も学生に効果が自覚されるアクティビティであると言える。

次にもう一つの2次的なメリットは、このアクティビティを通じて学生がノートテイキングの練習をすることになることである。英語を聞いて要点のメモを取ることは慣れないとなかなか難しいものなので、ここでの練習は有用であると思われる。(特に留学したり、将来仕事で使う人にとっては大きな力になるだろう)

また毎年物語を楽しむに学生が出てきて、これが授業に出席する動機付けにもなったようである。diaryにも「風邪で調子が悪かったのだけれど、物語がどうなるのかが気になって休めなかった。」ということを書いた学生がいた。

2. 3 Vocabulary and Topical Knowledge Building : Reading Weekly Magazines

2. 3. 1 Vocabulary and Topical

Knowledge Building : Reading Weekly Magazinesをアクティビティとして採用するようになった背景

話すためには自分の話すトピックについての語彙やよく使用される文構造などを知っていて、使いこなせなければならない。Weekly Diaryを書くことによって身の回りのことについては絶えず英語にしているの、そういう点ではある程度対応できるだろう。しかし大学生としてそれだけのトピックについてしか話せないのでは少し物足りないように思う。日本や世界の政治、経済、文化などの主要な話題についてくらは少し話せるようになってほしいし、せめてその話題について行けるように準備させたい。また小室(1997a, p.95)でも取り上げたように英語力と平行してできる限り学生に知識(含む背景知識)や問題意識を与えたいという希望がある。したがって語いだけでなく知識も平行して与えるようなアクティビティを一つ加えることとなった。そこで毎週英字週刊誌を読ませて、それを元に何かできることを考えることにした。使用したのはJapan Times社から発行されている週間ST。この週刊誌は最初の見開き2ページに、前の週に起こった世界や日本の主要なニュースを短い英文でまとめている。英文はTimeやNewsweekなどと比べれば短く平易で、難しい語句には注もついているので、英語がそれほど得意でない学生でも入っていきやすい。見開き2ページだけなので、全部読んでもそれほど時間はかからない。(しかし英語に力を入れている大学の通訳中級の授業や通訳養成の専門学校などでも読むことが義務付けられるなど平易な割には充実しているという定評のあるものである)

2. 3. 2 Vocabulary and Topical Knowledge Building : Reading Weekly Magazineの実施手順、指示の仕方とその注意点

実際には毎週読んできてくれればそれでよい

のだが、学生の自主性にまかせてただ「読んでくるように」と指示していただいただけではなかなか読んでこないという現象があった。そこで「毎週見開き 2 ページから 5 つの単語または語句を小テストでチェックする」という指示をして毎週語いテストを行うこととした。やり方としてはその語句の含まれる辺りのパラグラフを読み上げて、その後にその語句を読み上げて書かせる。具体例を一つあげて見よう。

例

読み上げる部分

“Former Construction Minister Kishiro Nakamura was sentenced Oct.1 to 18 months in prison for accepting a 10 million yen bribe from a construction company trying to block a government bid-rigging probe.”

出題

“OK here we go. Number one (問 1 ということ), sentenced to~, sentenced to~”
(通常 2 回読み上げる, 英語で質問されたときのみ 3 回目を言うようにしている)

“Number two, bribe, bribe.”

(実際にはこのように一つのパラグラフの近いところから 2 問出題することはまれである)

学生にはまず英語で問題を書いて、その右に日本語訳を書くように指示している。ただし spelling の誤りは減点しないので、とにかく書いてあればよいことにした。減点しない理由は spelling の誤りまで減点すると正答率が低くなり過ぎて学習する意欲を失ってしまう恐れがあることと、ここでは意味内容に重点があることを認識させたいからである。書かせる理由は、以下の①～③を期待してのことである。

- ①学生が日本語だけ書いた場合より英語も書いた方がその単語の印象が深くなり記憶に残るのではないか
- ②耳で聞いた単語の spelling (特にわからない場合) を精一杯書こうとしているうちに少し音声と spelling の関係 (及び音声を抜きにし

た spelling 自体) の法則性や感覚などがわかってくるのではないか

- ③spelling は減点されなくても書けない場合は気になって自分でチェックするのではないか (少なくとも spelling の細部に注目するきっかけになるのではないか)

また教員の管理上の利点として、複数のクラスで問題を変えているような場合後で記録したり、次回の出題を考えるとどのクラスにどの問題を出したかが一目瞭然で便利であることがあげられる。

この小テストの答えは文脈重視で、その単語の意味として正しくても文脈の上で適切でないものは不正解とすることを原則とした。

例 (下線部が出題されたもの)

vice president of Nissan ~ という文脈での「副大統領」(正解は「副社長」)

He is going to succeed his father as president. という文脈での「成功する」(正解は「引き継ぐ」)

(また逆にもととの単語にそういう意味がなくても文脈上そういう意味が当てはまるものは正解とした)

出題は学生のレベルによって、より基本的なものにしたり難しいものにしたり調整した。初級の学生の場合には無理があるのなら範囲を狭くすることも考えられる。英語では通常最初のパラグラフに事件の概要が出てくるので、タイトルと第一パラグラフだけを範囲にするという手もある。(もっとも初級の学生でもできれば全部を読ませたいが…)

少し習熟度が上になると単語よりもフレーズで出題することも考えてもよい。上の例で言うと “bribe” (賄賂) を “accepting a bribe” (収賄) のように発展させることを指している。

出題の際にはなるべく英語でヒントを言うようにしている。これは学生にはヒントを言うとは説明していなくて、思わず口が滑ったような感じで言うようにしている。よく聞いている学

生は「あ、そうか」という得した感じを持つようである。例えば上の例に書いた中村元大臣のパラグラフのsentenced to ~のときならば、
 “Oh, so the court decided to send him to prison for more than a year. Serves him right!” と憤ったように言う。(中にはこれがヒントになっていることに気付かないが、無意識でこのヒントを活用していると思われる学生もいる。)

答え合わせをした後には各記事のポイントの解説、必要ならば歴史的経緯などの背景を説明する。簡単なものならば英語で話すが、少し複雑なものは日本語で説明している。ここは知識や問題意識を与えることが目的であるからだ。(しかし説明の間には“Did you know that?”などと合の手やあまり長い答えを要求しないような確認の問いをなるべく混ぜるようにはしている)

ともあれ学生は毎週英語で主要なニュースを読み、key wordを暗記して、その問題の背景について考えることになる。すると継続的效果で、ある事柄の前からの経緯がわかることで記事が理解しやすくなったり、key wordも繰り返し出てくるので段々覚えていったりということが起こる。またこうしたことをすることで毎週英語でニュースを読むことがそうたいしたことではない、自分にも十分できることだという自信も付くようである。少数ではあるがそこからNewsweekなどを読むようになる学生も出てくる。

ふだんきちんと新聞を読んでいない学生にとってはこの英字週刊誌を読むことが、それに代わる情報収集の手段となってもいるようである。「前に比べると社会や経済の色々なことがわかるようになった」とか、「就職の面接のときに英字週刊誌に出てきたことを聞かれて助かった」と言ったことがdiaryに書かれたりした。

2. 4 Telling Opinions in English

2. 4. 1 Telling Opinions in Englishをア

クティビティとして採用するようになった背景

上記の3つの柱の基礎訓練の中にはない要素が自分から発声するという部分である。自分が持っている能力を総動員してとにかくoutputを出す部分が不足している。本来はここでディスカッションのようなものを入れたり、タスクを解決するような会話を入れたいところである。ところがこうしたアクティビティに時間を取るとどうもスムーズに入っていけない壁が学生の間にあるようなのである。発信になれてないのか、恥ずかしいのか、無言や日本語の時間が長くなってしまふ。学生の積極的に関わろうという意欲がなければこうしたアクティビティは時間の無駄になってしまう。残念ながら今のところこの点を解決する方策が思い付かない(ただし限定的な試みは後述する)ので、もう少し学生が参加しやすく発信への準備運動となるアクティビティを考えることとなった。それがTelling Opinions in Englishである。これは通常は教科書の「あるトピック」についての一連のエクササイズを行った(ある程度の情報や語いはここから入手できる)後に自分の意見を英語でまとめて来て発表するものである(教科書のもの以外のトピックも適時混ぜている)。これはplanned speechであり、そういう意味では会話のようなやり取りがないが、とにかく英語で話を組み立てること、人前で大きな声で話すことなどを通じて会話の準備運動の一つにしようと言うわけである。

2. 4. 2 Telling Opinions in Englishの実施手順、指示の仕方とその注意点

これは通常前に出て発表するわけだが、メモを見ることは許されているがその見方については後述するような指示をしている。学生には発表に際してシナリオライティングの側面とdeliveryの側面があると説明している。まずシナリオライティングの部分はどのような話をするかネタを探し、使用する語いや構文などを選び、

全体の組み立てをやる。ここではまず聞いてもらうための工夫について繰り返し学生に話している。漠然と抽象的なことを並べても人の興味は引かないので、具体例、個人的体験、人の知らない情報、意外な情報、問題の解決策の提案などを入れて話すように指導している。（しかし半数近い学生があまり工夫をしないという現状はある）

語いや構文についてはなるべく背伸びしないで簡単なものを使用すること、和英辞典の難しい語は学習者用の英々辞典（Longmanの現代英々辞典など）でもう一度引いてみるとやさしい英語になるなどのノウハウを説明している。

組み立てについては最初にメインアイディアを述べて、それを支えるような形で例などを出すように少なくとも努力（できる学生はそれほど多くない）するように指示している。

内容もちろん大事であるが、学生にはなるべくdeliveryの部分の方を意識するように言っている。まずここで大切なことはシナリオを書いたなら必ず、事前にそれを（大勢の人に向かって言っているイメージで）2, 3度声に出して読んでおくことである。注意しないと多くの学生はシナリオの完成で止まってしまう、発表時に単語が発音できなくて絶句したりすることになる。（それは一度も読んでこなかった証拠であるとして、授業中は厳しく言っているが全員に徹底させることは難しい。）次にメモ紙の使い方については見るのはかまわないがなるべく依存度を低くするように指示している。紙だけに集中するような読み方ではトーンの上でも人に伝わりにくくなるので、少しずつでも聴衆を見て（eye contactが大切である）毎回、前回より1cmでも顔から紙を離すように言っている。最後に自分の声をよく聞くようにして、できれば声の大きさ（途中でfade outしないかなどを含む）、発音の明瞭さ、声のトーンなどに注目するように指示している。（可能ならそういう点を調整してbestの状態に持っていけるようにする）

こうした様々な点について発表後一人一人について改善点を示唆している。

全体が単調にならない工夫としてはペアを組ませてお互いの意見を相手に話して、（ときには質疑応答も起こり、夢中にでもなれば会話らしい展開になる→上で述べた限定的な試みと言うのがこれである）お互いがメモを取り、後で自分のではなく、お互いのパートナーの意見を発表するという方法がある。（これは特に夏休みの後にsummer highlightというトピックで話すときには有効である）

このアクティビティは実際の会話より心理的負担を軽くしたもので最低限必要なものと考えているのであるが、それでも4つのアクティビティの中では一番軌道に乗りにくいものである。授業後のアンケートでも「もっとちゃんとやれば力がついたはずだと思うけれどもうまくできなかった」というような意見が多い。

2. 5 + 1 → Shadowing and Voice Training

上に述べた4本柱以外で重要であると思われるのがshadowingである。これは英語のテープなどを聞かせて、耳で聞こえた瞬間からどんどんそれを口で反復してついて行く訓練である。つまり通常テープのリピーティングが切りのよいところで（テープが沈黙している間に）それまで聞いたものをまとめて反復するのに対し、shadowingは自分が話している間にもテープは話し続けていて（つまり話しながら次の部分を聞いてもいることになる）それにワンテンポ遅れでついて行くことになる。このアクティビティは通訳養成の際の訓練に使われることが多く次のようなメリットを持っている。

- ①native speakerの全体的な発音、イントネーション、間といったものを体感できる。
- ②英語のキューでスピーディに反応することで、英語を使うときには鈍くなりしがちな脳を刺激する。
- ③英語を口に出すときの口の回転が滑らかになる（native speakerのスピードについていかなければならないので）

これはある程度同じテープで繰り返し行っ
てから、新しいテープに変えるとよいだろう。そ
の際には最初のころは意味にあまり囚われず、音
を繰り返すことに集中して、それに少し慣れて
から意味を考えるように指示している。

voice trainingは声がよく聞こえなかったり
することに対する対策である。こうした息の弱
さを改善するために次のような発声練習を行っ
ている。

- ①母音などを一つずつ順番に息の続く限り発声
してみる練習（劇団などで行われているタイ
プのもの）
- ②関係代名詞が続くような長い文を一息で言わ
せる。（あるいはできるところまで）
- ③ささやきで（無声化して声帯を振動させない）
英語を話させる
など。

3. 授業の組み立て、及び注意点

ここでは90分の授業の組み立てを論じたい。
上で述べたようなアクティビティをどのように
組み合わせ、どういう点に気を付けているか
を見ていこう。

- (1) 授業開始前に教卓の上にweekly diaryを提
出させておく

学生は前もって出席番号で5人ずつくらいの
グループに分けておき、それぞれのグループに
グループ番号を与えておく（例えば①～⑧）。
学生にはその番号を表紙とその週書いたdiary
の末尾に大きく書いておくことを義務付けた。
学生は教室に入るとあらかじめ定められた場所
に、番号別にノート（その週の書いたところ
を）開いて置く。グループ番号が開いたページ
にも書いてあるので後から来た学生はそれを確
認してその上に自分のdiaryを乗せていくこと
になる。教員が教室に入ってきたときには約5
冊ずつ重ねられたノートの束が8つほど教卓に
乗っていることになる。それを手早くグループ
番号順に一つの束に重ねる。（グループ内では

多少順番が違って、これでは出席番号順に
なる）*ノートのサイズはB5版に統一してあ
るし、グループ別に別れて置いてあるので素早
く集められる。

- (2) その日の導入の話を英語でする（約10分）

まず英語であいさつをしてから、Today I
had a very scary experience … などと学生の
興味のある話を英語でする。途中英語で
学生に質問したり、感想を聞いたりする。

- (3) 紙を3枚配る。（一枚が語いテスト用、も
う一枚がlistening and guessing用、最後の
一枚が他者の発表の要約を書くため用）
- (4) 英字週刊誌を読み上げて五問の語いテスト
を行う。→終了後はペアで交換させ、解答を
発表して評価を付けさせる。→テストを回収して、
その背景知識などの解説を行う。（3、4で計
約25分）

*テストの評価は5問正解がA+で以下A、B、
C、D（一問以下）の5段階評価でC以上が合
格点である。

- (5) 学生にはshadowing及びlistening and
guessingをさせる（聞きながら紙にあらすじを
書かせる）その間に教員はweekly diaryを読ん
でコメントを書き、スタンプを押し、記録を付
ける。ただしshadowing時はヘッドホーンでモ
ニターしていて問題のある学生にはintercomで
話しかける（例えばHiroko, louder please! の
ように）
- (6) listening and guessing用の用紙を回収、
スクリプトを配って、それを見ながらもう一度
テープを聞かせる。そして補足説明をする（5、
6で約25分）
- (7) 学生がtelling opinionの発表をする
*それ以外の学生は配られた紙に発表の要点を
書く。（約25分）
- (8) 発表の要点の紙を提出、Weekly Diaryの
返却、連絡事項（約5分）

以上が大まかな手順である。これ以外に私が
possible mini lectureと呼んでいるミニコーナ

ーがあり、「英語による数字の読み方、表し方」「異文化における名前の呼び方」「スラングの使い方」「日英意味比較：ガールフレンドvs. girlfriend」etc.などについて授業の切りのよいところに単発で入れている。

4. 結び

本論では①スピーキング能力の育成を目標にした授業で実際に行っていることをなるべく詳しくまとめること、②それを何故行っているかという私なりのrationaleを提示すること、及び③実施や管理上の細かい注意点をなるべく詳しく書き込むこと、の3点を骨子としてまとめたものである。まだまだ理想の授業にはほど遠い現状であるが、ある程度の基礎能力訓練のプログラムにはなっていると思われる。自分でもい

っそう改善してよりよい授業を目指すのはもちろんであるが、本論の読者からもぜひこの授業をさらに発展させるための建設的批判をいただきたいと思う。

参考文献

- Kanatani, K., K. Itoh, T. Noda, Y. Tono and N. Katayama. 1993.
The Role of Teacher Feedback in EFL Writing Instruction. 平成3 - 4年度文部省科学研究費補助金研究一般研究B 課題番号 03451105.
- 小室 俊明. 1997 a. 「スピーキング能力の構造と指導」『二松学舎大学国際政経論集』5, pp.87-96
- Hatori, H., K. Itoh, K. Kanatani and T. Noda. 1990.
Effectiveness and Limitation of Instructional Intervention by the Teacher: Writing Tasks in E.F.L. Report of the Research Project, Grant-in Aid for Scientific Research No.634500035.